

まんだら通信

第207号 (通巻242号)

平成25年09月 西暦2013年 佛曆2579年 皇紀2673年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

あそか基金

もう二十五年近く前になります。スリランカの成田山幼稚園に滞在していた時、園長代理のようなお仕事をしているモットゥネ・アンギラサという名前の坊さんとお近づきになりました。私は「アンギーさん」とお呼びするのですが、この坊さんは千葉県の佐原にあるスリランカ寺と往復し、日本語の読み書きが不自由なく出来ることから、自然にお互いの国の話題になりました。



どちらの国も天然資源が乏しく、教育熱心なこと、人柄が優しい人が多いです。私がお寺の檀家は五百軒で、日曜学校には二百人ぐらいます。このお話が『まんだら通信』でお読みになった東京の社長さん達が、別に何百万円かを寄付されたのだそうです。先日届いたメールによると、奨学生は全部で百六十六人、その内『あそか基金』の子供さんは四十五人だそうです。そして驚いたことに、いつの間にか元金が三百六十万円になったそうです。

この金額の殆どは、『まんだら通信』の読者の方々から、お盆の棚経の折に戴いたものや、切手代に『あそか基金』に指定して届けて下さったり、四カ月の政府の子供手当で四万円を「子供は、苦労して親が育てるものだ」と、ソックリ送って下さる方などで、私の分は僅かな金額です。尚、現在の金利は6.0〜9.5%の高額だそうです。スリランカの経済成長は目覚ましいのですが、お金の力を較べると、日本の円はスリランカのルピーの十倍はあると思います。それから、預金額は三千六百万円の値打ちがあることになるでしょう。

い来ています。でも貧しい人がとても多いから、勉強を続けることが難しいのです。」といいました。この話があつて何年後、私の小遣いから一年に六万円をアンギーさんに渡して、その利息で一人の子の教育資金にするという、世界一小さな『あそか基金』が始まりました。憶えている方もおいでかと思いますが、始めての子はピアドルシャニという女の子でした。このお話を『まんだら通信』でお読みになった東京の社長さん達が、別に何百万円かを寄付されたのだそうです。先日届いたメールによると、奨学生は全部で百六十六人、その内『あそか基金』の子供さんは四十五人だそうです。そして驚いたことに、いつの間にか元金が三百六十万円になったそうです。

ところで、スリランカを訪ねると、村や町の到るところに、日本の援助で造った幼稚園があります。戦後、日本に戦争の傷跡が沢山残っていた昭和二十七年、サンフランシスコ講和会議がありました。この時、敵国であった日本のために、「日本の掲げた理想に独立を望むアジアの人々が共感を覚えたことを忘れないで欲しい。恨みは恨みによって消え去ることはない。恨みを捨てることで平和が来るのだよと、ブツダも言う通り戦勝国の皆さん、賠償権を放棄しようではないか」と壇上から熱弁を振るった、当時のスリランカ蔵相で、後にスリランカ大統領になったジャヤワルダナさんのお恩に酬いる気持ちを私たちが忘れていないからですね。このお方ご自身も大の親日家で、「片方の角膜を日本人に、もう一方はスリランカ人に」が遺言だったそうです。

二十余年余り前になりますが、以前この『まんだら通信』(174号平成22年12月号)でご紹介した、スリランカのツルミ・ガマ(鶴見村)の贈呈式の時、成田山のご賓主、鶴見御前さまのご名代で出席した、橋本照稔現ご賓主さまも、やはりこの話を取り上げていたことを思い出します。当時から日本に好意を持っていた国は沢山あつて、カンボジアのシアヌーク殿下は戦後間もなく昭和天皇と国民を励ますために来日したそうですし、タイ国王は「アジアを開放するために払った日本の犠牲を、我が国民は忘れてはならない」と仰ったそうです。始めのころの奨学生の中から、大学を卒業して役所に就職した人や、自ら企業を興した人など出始めたということです。私も七十九歳になりましたし、気軽にこのこと出かけられなくなるでしょう。この日本で、『あそか基金』の同窓会が出来ることを楽しみにしています。

余滴

▼昨日辺りから、漸く涼風が吹き始めたようです。私も、過ぎた5日で79歳。運が良ければ、7年後の東京オリンピックを見ることが出来る…かも知れません。▼それにしても安倍総理の「日本は、今でも放射線では世界一安全な国です」と断言したのが決め手だったと思います。安倍さんには、それを我々国民に直接話していただきたい。「だから、福島の人たちは、農業も漁業も安心して続けて下さい。総て政府が責任を持ちます」と。こう言うと「そんな無責任を言って、若し病気になったらどうしてくれる。」という人が必ず出ます。でも、これは原発事故のすぐ後から、真面目な科学者・お医者さんは太鼓判を押していたのに、マスコミが無視し続けていることです。そもそも放射線が原因で亡くなった人、病気になった人は一人もいません。亡くなったのは避難所暮らしや、家族離れ離れのストレスなどだということです。▼以前にも書いたかも知れませんが、お釈迦さまは80歳の時、ご自分の体力の衰えを悟られ、最後の旅に出ました。私はお釈迦さまほどの体力はありませんので、

お参りできるのは今年辺りが限界と思って、11月1日から1週間、お釈迦さまが最後に歩かれた道を迎ろうと決めました。▼今月の野草はガガイモ【ガガイモ科ガガイモ属】です。花径は1センチほど。蔓性で多年性。8月の終わり頃から白から薄紫の花を咲かせます。この名前、神話時代からあるそうですが、芋ができるわけではなく、何とも不思議ですが納得できる説明は見当たりません。秋が深まる頃、10センチほどのサヤができ、中には銀色の長い毛を持った種子が詰まっています。2013/09/09 龍渉



につぼん人情小噺

三遊亭鳳豊 ほうほう

第九十二話 ランニングマン

いま、全国で市民マラソンが盛んですねえ。

その練習のためか、この暑いのに、早朝から多くの人たちが走ってますねえ。なかには、突然の雷雨のなかでも走っている人がいて、むしろ心配になってきます。いえいえ、私はダメです。もともとはラグビー部だったものですから体力には自信があったのですが、四十代で心臓にバイキンが入る心内膜炎という大病を患ってから、早足で歩くだけでも息が切れてしかたがありません。

マラソンって、息の吐き方、吸い方が大事なんだそうですね。吸って吸って吐いて、吐く。スッスッ、ハッハッ、スッスッ、ハッハッ……懐かしい歌のメロディが聞こえてきます。♪いかにいまくすくスッスッ、ハッハッ。くだらない。日本の文学者で、この息づかいが一重上手だった方知ってます？ 北原はくすう。もう、やめておきましょうね。

今日は、ベトナムで実際にあった話をしましょうか。テレビのニュースでごらんになった方もいらっしゃると思いますが……。

ベトナムのハノイに、ひとりの貧しい青年がいました。ブー・スアンティエン君、二十歳。医学生ですが、家が貧しいので、ハノイに出てボロアパートで暮らしながら、勉学に励んでいます。

彼の唯一の趣味は、サッカーのテレビ観戦です。好きなチームは、イングランドのプロサッカーチームの名門アーセナル。おじいちゃんもお父さんもアーセナルのファンなので、子供の頃から自然にアーセナルのファンになってしまったようです。

そのアーセナルがアジア・ツアーでベトナムに試合をしにやってくると聞いた時のティエン君の喜びといたらありませんでした。実際に、この目でアーセナルの選手たちの姿を見ることができるところから。

しかし、入場券は最低でも日本円で五千元。ティエン君のひと月分の食費です。もし、切符を買ったら、一カ月、空腹で過ごさなければなりません。でも、選手をこの目で見たい。一生に一度のチャンス。ティエン君は考えました。そして、出た結論は、アーセナルの選手たちが移動中のバスを待つことでした。

調べてみると、アーセナルの選手たちがハノイ市内をバスで観光することがわかりました。だとしたら、きつこの道を通るはずだ。ティエン君は、そう確信すると、その日、メインストリートの一角でアーセナルの選手たちを乗せたバスを持っていました。

ティエン君と同じ気持ちの若者たちも数人、同じところで待っています。彼らも試合を見に行けないファンでした。それは、ティエン君と同じ赤地に白い袖のアーセナルのユニフォームを着ていることわかりました。

一時間も待たせようか。予想通り、アーセナルの選手を乗せたバスがやってきました。そして、目の前を走り去ろうとした時、ティエン君は思わず、バスを追いかけました。

もともとランニングには自信がありません。おこづかいがないティエン君にとって、ランニングはお金のかからない最高のスポーツだからでした。走るんだ、走るんだ！

一キロが過ぎました。ティエン君は、バスの窓から自分を見てくれている窓際の選手たちに笑顔で挨拶を交わし、アー

セナルのユニフォームの胸のあたりを叩いては、自分か熱狂的なアーセナルのファンだということを教えました。

二キロ、三キロと並走しているうちに、いつの間にか、向こう側も窓際の選手たちまでが立ち上がり、ティエン君を見て笑っているのがわかりました。

(ああ、選手たちが僕を見てくれているー) バスは、かなり早いスピードで走っています。でも、ティエン君は、選手たちが自分の走っている姿を見て笑ってくれているのが楽しくてしかたがありません。

五キロあたりで、だんだん、疲れが出てきます。息が切れはじめました。でも、バスを必死で追いかけている自分を動画で撮ってくれている選手がいることがわかり、ティエン君は大きく息を吸うと、また走りはじめました。でも、苦しい。心臓がいまにも破れて飛び出しそうです。時間にして十五分は過ぎたでしょうか。さすがのティエン君も疲れ、足がもつれてきました。そして、次第にバスに遅れ、とうとう並走ができなくなってしまったのです。ああ、ダメだ！

バスの中は大騒ぎ。「監督、あの子と契約をしると冗談が飛び交い、盛り上がりましたが、窓からティエン君が消えた時、多くの選手たちからため息が漏れました。その時、再び、バスの中から選手たちの歓声が巻き起こりました。なぜなら、選手たちが見ていたバスの窓に、再び、ティエン君の姿が見えたからです。なんと、ティエン君は、オートバイの後ろに乗っていたのです。

もう走れない、とその歩みを止めた時、後ろを走っていたバイクの青年が「乗れ！」と言ってくれ、いっしょにバスを追ったのです。バスの中は、笑い声と歓声で大騒ぎになりました。

そして、誰ももなく、「あの子をバスに乗せてやれ、彼こそ、本物のアーセナルファンだ！」と言い出したのです。

ティエン君がバスの窓の選手たちに手を振ると、選手のひとりが「ユニフォームを脱げ、サインしてあげる」というゼスチャーをしているのに気づきました。ティエン君が言われた通り、走っているオートバイの後ろで着ていたシャツを脱いだ時、バスが止まり、ティエン君は憧れのアーセナルの選手たちの輪のなかに招き入れられたのです。すでに八キロ追いかけた後のことでした。

そして、監督以下、全選手がサインをしてくれ、写真を撮ってくれました。それだけではありません。敢日後行われたハノイでの親善試合にアーセナルの選手たちの先導役として、ピッチに立つことができたのです。貧しい彼への最高のプレゼントでした。

アーセナルの名ゴールキーパー、シュチエスニールはこう言いました。「諦めなければ夢は必ず叶うということ、彼が僕たちにも教えてくれたね」

ティエン君は、自分が手に入れたアーセナルの全選手のサイン入りユニフォームを、故郷のお父さんに送ってあげたそうです。

今月も、MOKU出版と筆者三遊亭鳳豊師匠のご好意で転載させていただきました。

他には、程度が高過ぎる記事が多いのですが、我慢して読んでみると、人間お金ばかり追っても幸せになるわけじゃないなと分かってくる……。いつてみればいぶし銀のような、今どき珍しいそんな雑誌です。

どのような人たちが読んでいるのか、以前から興味を持っています。

